

題材資料

Lesson 2

Iwago Mitsuaki

—An Animal Photographer



1. 岩合光昭さんについて

【経歴】

動物写真家、岩合光昭さんは、1950年11月27日、東京で生まれた。父は動物写真家の岩合徳光さん(1915(16)–2007)で、『動物写真の技法』(共立フォトグラフィックシリーズ)の著者であり、動物写真家の草分け的存在である。

岩合さんが動物写真家を志したのは19歳の時である。まだ学生だった彼は、父のアシスタントとしてガラパゴス諸島に同行した。岩合さんがガラパゴス諸島で見た景色は、岩場を這うウミグアナ、サーフィンをするように泳ぐアシカ、手を伸ばせば届くところにいるカツオドリなど、まさ

に手付かずの大自然であった。

その大自然に圧倒され、動物写真家になることを決めたのである。

大学卒業後、岩合さんは父に習い、動物写真家としての道を歩み始めた。世界30か国を巡って写真を撮影し、1979年にはその写真集である『海からの手紙』で木村伊兵衛写真賞を受賞した。その後は、よりダイナミックな写真をそこに住む人の視点から撮りたいという思いから、アフリカのセレンゲティに移住する。帰国後に、現地で撮った写真をまとめた『セレンゲティー—アフリカの動物王国』を出版した。これを『ナショナルジオグラフィック』誌の編集者に送ったことがきっかけで、1986年5月号で日本人写真家として初めて、本誌の表紙を飾った。その後1994年12月にも表紙に写真が掲載され、日本人で初めて『ナショナルジオグラフィック』誌の表紙を2度飾った。独特なコントラストを持つ彼の写真は『IWAGO' S COLOR』と呼ばれている。



ナショナルジオグラフィック
ナショナルジオグラフィックパートナーズ社の月刊誌。当初非営利団体「ナショナルジオグラフィック協会」の公式雑誌として発行されたが、2015年21世紀フォックスに売却され、ジオグラフィックパートナーズの刊行物となった。ナショナル表紙の黄色の枠を特徴とし、世界36か国で発行、180か国以上で850万人に購読されている。写真の選定については厳格で、最高品質の記録写真を掲載してきたことでも知られる。多くのカメラマンの撮影してきた写真の紙面に載るのは1万枚のうち1, 2枚という。

岩合さんの活躍は写真集のみにとどまらない。ネコをライフワークとして撮り続け、ネコに関する著書には『ねこ』『ふるさとのねこ』などがある。また、テレビ番組『世界ネコ歩き』では、世界中のネコを撮影している。

2. セレンゲティ

◆セレンゲティでの経験

岩合さんは1982年8月から1年半にわたってアフリカのタンザニアによるセレンゲティ国立公園に妻と4歳の娘とともに移住して野生動物の写真を撮影した。岩合さんが移住先にセレンゲティを選んだ最大の理由は、大型哺乳類が多く生息していること、そしていきもののつながりが見えることであった。実際、彼が住んでいた村は、トムソンガゼルが飛び跳ねたりキリンが葉を食べに来たりするような場所

指導用各種データサンプル
であった。そのため、はじめは草食動物が草を食べ、肉食動物がその草食動物を食べる、といった自然のさまざまなつながりを写真に収めたいと考えていた。しかし生き物のつながりは複雑で、なかなか撮影ができなかった。思うようにいかず、緊張とストレスで吐いてしまうこともあったという。そして撮影を始めてから3か月が経ったころ、岩合さんの自然観を大きく変える出来事が起こった。ある日、撮影の出先で車が故障してしまい、水筒をひとつだけ持って歩いて帰ることになった。その距離はおよそ35キロメートル。ヌーの群れやジャッカルのカップルなどさまざまな動物を見かけたが、最も印象に残ったのがキリンであった。キリンは高いアカシアの木の葉を長い舌を使い、とげをものともせず、枝を巻き取って葉をおいしそうに食べていたのである。その姿を見て、その美しさに感銘を受けたという。弱肉強食の世界を撮りたがっていたが、「自分はこういう瞬間を撮りたかったんだ」と雷に打たれたような気がしたという。

この日から、岩合さんの自然に対する考え方は変化した。固定観念から成る、自分が思い描く動物の姿を求めて走り回るのではなく、目の前にある自然のありのままの姿を受け入れようとするようになったのだ。そして、動物を撮るときはその動物をよく観察することが大切だということにも気が付いた。観察をすることで、撮りたい動物が住んでいる場所を推測でき、探しやすくなるという。

このようにして、岩合さんは独特な写真を撮ることができるのである。

◆セレンゲティ国立公園

セレンゲティ国立公園は、タンザニア連合共和国北部のマラ州・アルーシャ州・シニャンガ州にまたがる、自然保護を目的とした国立公園である。アフリカで一番良く知られた国立公園の1つ。1981年にユネスコの世界自然遺産にも指定された。セレンゲティとはマサイ語で“果てしなく広がる平原”を意味し、その名の通り、キリマンジャロの裾野に広がる広大なサバンナである。面積1万4,763km²の国立公園内には約300万頭の哺乳類が生息し、なかでも「グレート・ミグレーション」といわれる150万頭ものヌーの大群の大移動はセレンゲティ最大の見もので、毎年雨季（5月～7月）と乾季（11月～1月）の年2回行われる。

ガゼル、シマウマ、ヌーなどの草食動物は、乾季になるとケニアのマサイマラ周辺から南のセレンゲティ国立公園へ草を求めてやって来る。総移動距離は1,000km以上で、この長距離を2か月近くかけて、100万～300万頭もの大集団で移動する。雨季が来ると、動物達は再びセレンゲティからマサイマラへ逆戻りする。つまり「グレート・ミグレーション」は永遠に繰り返されるのである。サバンナの大地に広がる草を食べた草食動物は、糞を残しながら大地を移動する。大地は糞と雨季の水を栄養とし、また芽を出して草に成長。セレンゲティ国立公園では、この何千年も続く輪廻を実際に見ることができる。

指導用各種データサンプル

大型哺乳類、500種もの鳥類など、多種多様な生き物たちがともに生息するセレンゲティは地球上でも稀な場所である。



ヌーの大移動

3. ネコとのかかわり

岩合光昭さんは2012年からNHK BSプレミアムで放送されている『世界ネコ歩き』という番組で、世界中の街や大自然に暮らすネコを訪ね、自身でムービーカメラを回してその表情や行動を撮影している。当番組は、月1本のペースで新作が放映されているが、ネコが番組を観ている動画がSNSに投稿され、ネコの視聴率も高いと話題になった。本番組で撮影されたネコのありのままの姿を映した作品は『岩合光昭の世界ネコ歩き』という写真集にも収録されている。また、本番組は映画化され、『劇場版 岩合光昭の世界ネコ歩き コトラ家族と世界のいいコたち』と題して2017年10月21日に公開された。

岩合さんは、ネコの最大の魅力を「わからない」ところにあるという。ネコはペットとしては珍しく、ひもでつながれていない動物である。自由で、人の思い通りにはならない。そこが魅力的であるのだ。その

ため『世界ネコ歩き』の撮影では、飼いネコの場合、ネコの名前や性別、家族関係や1日の動きまでかなり詳しく把握している。

岩合さんはネコを敬愛し、「猫様」と呼ぶ。ネコに会うとまず初めに現地の言葉であいさつし、会話をする。撮影をする前に「猫様、写真を撮らせていただけますでしょうか。」とネコに尋ねる。そして撮影をするときにはネコの目線の高さに合わせてカメラを構える。このような、ネコを敬愛する姿勢が良い写真へとつながるのである。また、上手く撮るために「嫌われないコツ」を挙げている。自分がどのように撮りたいかという要求を考えるのではなく、ネコの意思を尊重しネコの自然な姿を写真に収めるのである。

『世界ネコ歩き』は、ネコに対する岩合さんのこのような考え方を反映した番組である。本番組を通して「命の大切さ」を感じ取り、ネコの味方になる人が増えてくれたらと岩合さんは語っている。



『岩合光昭の世界ネコ歩き』(2015年)

4. その他の作品

●写真集

・『北極』(講談社 1978年、岩合徳光との共著)

・『愛する猫たち』(講談社 1978) *初の単独写真集

・『海からの手紙』(1981年刊行) *『アサヒグラフ』連載の初期の代表作をまとめた写真集。

・『海ちゃん ある猫の物語』(講談社 1984、妻・岩永日出子との共著)

・『セレンゲティ アフリカの動物王国』(朝日新聞社、1984年) / 『サバンナからの手紙』(朝日新聞社、1985年)

・写真集『おきて』(1989年、小学館)

・『Australia オーストラリアの動物』(1989年、朝日新聞社) *1986年~89年、一家でオーストラリアに居を移して撮影した写真集。

・『カンガルー時間』(1992年、小学館)

*帰国後も取材を重ねて完成させた写真集で、有袋類カンガルーの生態、めったに見られない写真が収録されている。動物家族の営み。

・クジラの海 (1990年、小学館)

・『スノーモンキー』(1996年、新潮社)

*表紙カバーに使われた雪玉を持った子ザルの写真が日本人として2度めの『ナショナルジオグラフィック』の表紙を飾る。デジタルカメラで1日1枚366枚撮り続けたデジタル写真集。

(後略)